

入社ノ辞

夏目漱石

青空文庫

大学を辞して朝日新聞に這はい入つたら逢あう人が皆驚いた顔をして居る。中には何故なぜだと聞くものがある。大決断だと褒ほめるものがある。大学をやめて新聞屋になる事が左程さほどに不思議な現象とは思わなかつた。余が新聞屋として成功するかせぬかは固もとより疑問である。成功せぬ事を予期して十余年の径路を一朝に転じたのを無謀だと云つて驚くなら尤もつともである。かく申す本人すら其の点に就つては驚いて居る。然しかしながら大学の様な榮譽ある位置を抛なげつて、新聞屋になつたから驚くと云うならば、やめて貰もらいたい。大学は名誉ある学者の巢を喰つている所かも知れない。尊敬に価する教授や博士が穴籠あなごもりをしている所かも知れない。二三十年辛抱しんぼうす

れば勅任官になれる所かも知れない。其他色々便宜べんぎのある所かも知れない。成程なるほどそう考えて見ると結構な所である。赤門もぐを潜り込んで、講座へ這はい上ろうとする候補者は——勘定かんじようして見ないから、幾人あるか分らないが、一々聞いて歩いたら余程よほどひまを潰つぶす位に多いだろう。大学の結構な事は夫それでも分る。余も至極しごく御同意である。然し御同意と云うのは大学が結構な所であると云う事に御同意を表したのみで、新聞屋が不結構な職業であると云う事に賛成の意を表したんだと早合点はやがてんをしてはいけない。

新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。商売でなければ、教授や博士になりたがる必要はなからう。月俸を上げてもらう必要はなからう。勅任官になる必要はなからう。新聞が商売である

如く^{ごと}大学も商売である。新聞が下卑^{げび}た商売であれば大学も下卑^{げび}た商売である。只^{ただ}個人として営業しているのと、御上^{おかみ}で御営業になるのとの差丈^だけである。

大学では四年間講義をした。特別の恩命^{もつ}を以て洋行を仰^{おおせ}つけられた二年の倍を義務年限とすると此四月で丁^{ちようど}度^ど年期はあける訳になる。年期はあけても食えなければ、いつ迄^{まで}も嚙^{かじ}り付き、獅^し嚙^がみつき、死んでも離れない積^{つもり}でもあつた。所へ突然朝日新聞から入社せぬかと云う相談を受けた。担任の仕事はと聞くと只^{ただ}文芸に関する作物を適宜^{てきぎ}の量に適宜の時に供給すればよいとの事である。文芸上の述作を生命とする余にとって^{これほど}是^{ありがた}程^た難^{がた}有^あい事はない、是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない、成功する

か、しないか^{など}杯^{など}と考えて居られるものじゃない。博士や教授や勅任官杯^{など}の事を念頭に掛けて、うんうん、きゆうきゆう云つていられるものじゃない。

大学で講義をするときは、いつでも犬が吠^ほえて不愉快であつた。余の講義のまずかつたのも半分は此犬の爲めである。学力が足りないからだ杯^{など}とは決して思わない。学生には御氣の毒であるが、全く犬の所為^{せい}だから、不平は其方^{そちら}へ持つて行つて頂きたい。

大学で一番心持ちの善^よかつたのは図書館の閲覧室で新着の雑誌杯^{など}を見る時であつた。然し多忙で思う様に之^{これ}を利用する事が出来なかつたのは残念至極^{しごく}である。しかも余が閲覧室へ這入^{はい}ると隣室に居る館員が、無暗^{むやみ}に大きな声で話をする、笑う、ふざける。清

興を妨げる事は莫^{ばくだい}大であつた。ある時余は坪井学長に書面^{たてまつ}を奉て、恐れながら御成敗を願つた。学長は取り合われなかつた。余の講義のまづかつたのは半分は是^{これ}が為めである。学生には御氣の毒だが、図書館と学長がわるい^{そつち}のだから、不平があるなら其方へ持つて行つて貰いたい。余の学力が足ら^{はな}んのだと思われては甚だ迷惑である。

新聞の方では社へ出る必要はないと云う。毎日書齋で用事をすれば夫^{それ}で済むのである。余の居宅の近所にも犬は大分居る、図書館員の様に騒ぐものも出て来るに相違ない。然しそれは朝日新聞とは何等の関係もない事だ。いくら不愉快でも、妨害になつても、新聞に対しては面白く仕事が出来^るる。雇人が雇主に対して面白く

仕事が出来れば、是が眞正の結構と云うものである。

大学では講師として年俸八百円を頂戴ちようだいしていた。子供が多

くて、家賃が高くて八百円では到底とうてい暮せない。仕方がないから

他に二三軒の学校を馳かけあるいて、漸ようやく其日を送つて居た。いかな

漱石もこう奔命につかれては神経衰弱になる。其上多少の述作は

やらなければならない。酔興すいきように述作をするからだと云うなら

云わせて置くが、近来の漱石は何か書かないと生きている気がし

ないのである。夫丈それだけではない。教える為め、又は修養の為め書

物も読まなければ世間へ対して面目がない。漱石は以上の事情に

よつて神経衰弱に陥おちいつたのである。

新聞社の方では教師としてかせぐ事を禁じられた。其代り米べいえ

塩^んの資に窮せぬ位の給料をくれる。食つてさえ行かれれば何を苦しんでザツトのイットのを振り廻す必要があろう。やめるとなと云つてもやめて仕舞^{しま}う。休^やめた翌日^{せなか}から急に脊中^{せなか}が軽くなつて、肺臓^{みぞう}に未曾^{みぞう}有^{みぞう}の多量な空氣が這^{はい}入^{はい}つて來た。

學校をやめてから、京都へ遊びに行つた。其地で故旧と會して、野に山に寺に社に、いずれも教場よりは愉快であつた。鶯^{うぐいす}は身を逆^{さかし}ま^{はつね}にして初音^{はつね}を張る。余は心を空にして四年来の塵^{ちり}を肺の奥から吐き出した。是^{これ}も新聞屋になつた御蔭^{おかげ}である。

人生意氣に感ずとか何とか云う。変り物の余を変り物に適する様な境遇に置いてくれた朝日新聞の爲めに、変り物として出來得る限りを尽すは余の嬉^{うれ}しき義務である。

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」筑摩書房

1972（昭和47）年1月10日第1刷発行

初出：「朝日新聞」

1907（明治40）年5月3日

入力：Nana ohbe

校正：米田進

2002年5月10日作成

2003年5月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

入社の辞

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>